



# 営農情報

第92号 令和2年2月5日

## 「あまおう」2月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 1 生育状況

2番果房はほ場によりバラツキが見られますが、早期作型で3～4果目収穫中、普通作型では着色～収穫初期が中心となっています。また、3番果房は株間・芽間の揃いもよく、順調に着果しています。天候不良（暖冬、高湿度）の影響で、ハダニ類や灰色かび病、菌核病の発生が増えています。また、アブラムシ類やアザミウマ類の発生も例年同時期に比べると多くなっています。

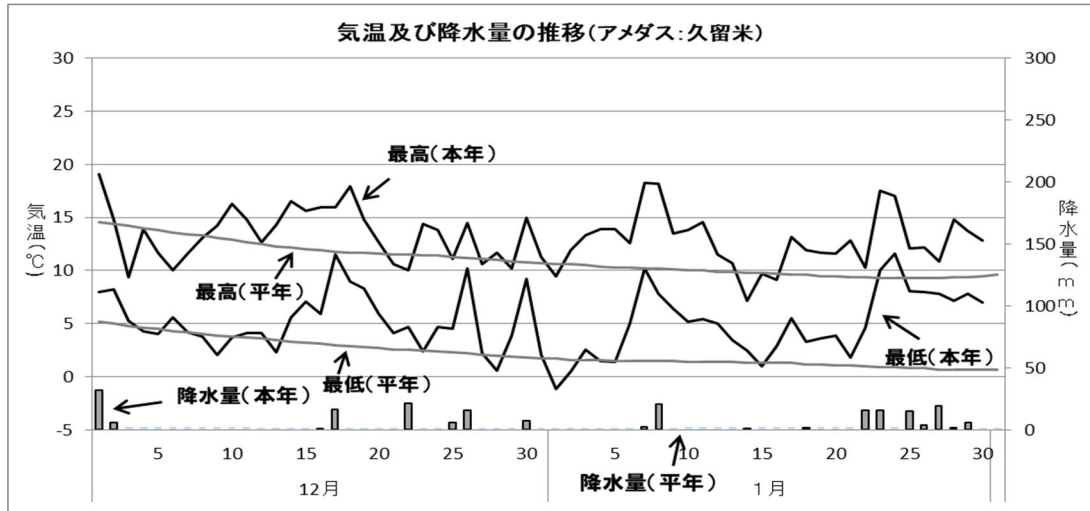


図1 気温及び降水量の推移（アメダス久留米より）

### 2 気象予報と今後の見通し

#### (1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

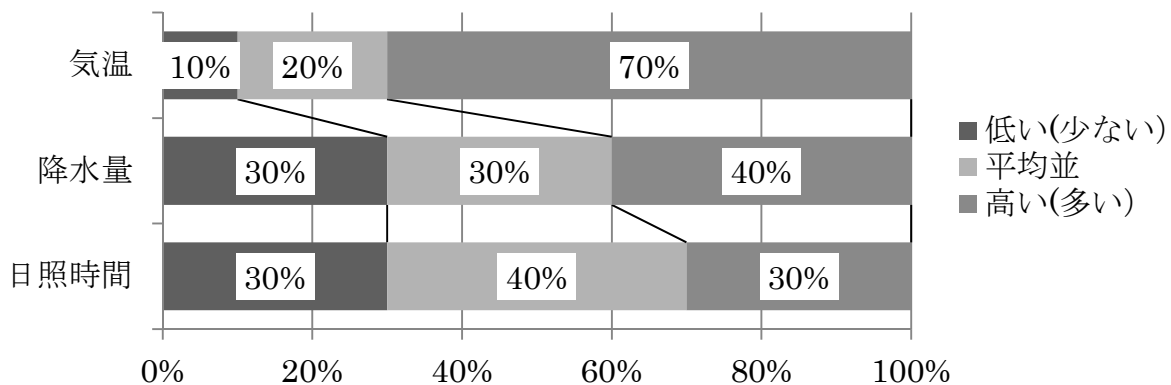


図2 1か月予報（九州北部地方 予報期間：2月1日～2月29日 発表日：1月30日）

#### (2) 今後の見通し

1か月予報では、平均気温は高い確率が70%、降水量は多い予報が40%となっています。寒暖差がはげしくなる時期でもあるため、株が急に立ち上がらないよう草勢管理に注意しましょう。

### 3 今後の管理

#### <ポイント>

#### 2 番果房の肥大促進、3 番果房の出蕾・開花促進を図る！

- ・ 2月上旬以降は、天気予報に注意して電照・温度管理（換気）等で急激な草勢変化をさせない！（食味低下、障害果の原因となるため）
- ・ 親株の炭そ病対策を開始する。

#### (1) 温度管理

- ・ 3番果房が開花するまでは、生育促進のため高めの温度管理とする。
- ・ 3番果房の開花後は、果実品質向上のため低めの温度管理とする。
- ・ 曇雨天日が連続する場合は、換気を重視し、低めの温度管理を行う。
- ・ 灰色かび病対策のため、日中は換気や循環扇の活用により湿度を下げる。
- ・ 気温の上昇に合わせてハウスサイド・妻面の換気を行えるように準備する。

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間
3番果房開花前	23～25℃	5～7℃
3番果房開花後	20～23℃	5～7℃

#### (2) 電照管理

- ・ 株が立ち上がりそうな場合は、電照時間を短くするか温度を下げる。
- ・ 電照時間は、柔らかい心葉が伸び上がり始めたら、草勢、着果負担、天候などに応じて、点灯時間を調整する。（2、3番の着果負担に注意）（2月上旬頃から）
- ・ 基本的に2月末から3月上旬で終了する。

#### (3) かん水

- ・ 徐々に日射量が増加するので、かん水間隔を短くする。
- ・ 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする）。
- ・ 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるハダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

#### (4) 施肥

- ・ 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・ 液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上がる原因になるため、液肥の施用量を減らす。
- ・ 毎年、3月以降に先青果が発生しやすい場合は、液肥の施用を控える。

#### (5) 株整理

- 株整理は、収穫量の少なくなるタイミングを見ながら行う。
- ・ 収穫が終了した果梗枝は早めに除去する。果梗枝が残っていると、3番果房の出蕾抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因になるので注意する。
  - ・ 無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。

- ・枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- ・葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果や着色不良果の発生が多くなるため、玉出しを行う。

## (6) 摘果

2番果房の摘果は、3番果房の出蕾を確認し、労働力や草勢、着果負担、果梗の形に応じて行いましょう。

- ・3番果房が連続している場合、2番果房は強めに摘果する。逆に3番果房が遅れている場合は、連続して収穫できるよう果数を多めに残すようにする。

### 【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗：3果/枝
かんざし果梗：6～8果/枝

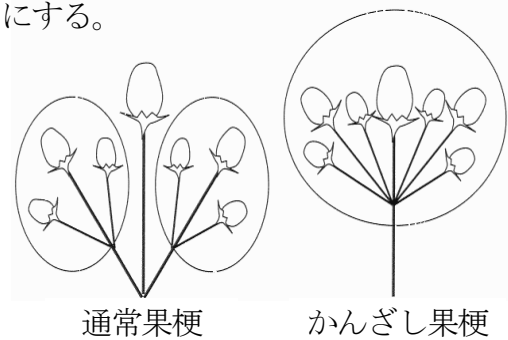


図3 果梗形状に応じた摘果

## (7) 果実品質向上対策

- ・急激な株の立ち上がりは「食味低下」、「果実の肥大不足」、「障害果」の原因となるため、電照・温度管理等で適正な草勢を保つ。
- ・収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は速やかに低温の場所へ移す。
- ・果実付近の通風が悪くなる場合は、病害や果実への「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い果実付近の通風を確保する。

## (8) 病虫害防除

### 【 ハダニ類 】 【 アザミウマ類 (スリップス) 】

特集に記載

### 【アブラムシ】

- ・暖かくなると急増するため、発生を確認したら速やかに防除する。
- ・ほ場周辺の雑草の除去を行う。
- ・薬剤の選定に当たっては、ミツバチに影響のある薬剤もあるため注意する。

### 【 うどんこ病 】

- ・3月以降に多発させないように、予防散布と早期発見が重要である。
- ・電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

### 【 灰色かび病 ・ 菌核病 】

- ・曇雨天の前などの発生を想定し、予防的な薬剤散布を行う。
- ・発病後は、早急に被害果実を取り除き、薬剤による防除を行う。
- ・特に、窒素過多で徒長気味の株では発生しやすいので注意する。
- ・湿度が高いと発生しやすいため、ハウスの換気を十分に行う。

## (9) 親株管理（次年産の炭そ病対策も忘れずに）

- ・炭そ病は10℃以上で胞子が発芽するため、感染源になる古葉は2月中に除去する。
- ・心葉が動き出す前から予防散布を開始し、心葉への感染を抑える。

## 特集「春先のハダニ・アザミウマ類の急増に注意しましょう」

年内から増加傾向だったハダニ類やアザミウマ類の発生が急増しています。今後、急激に密度が上昇し防除が困難となります。それぞれの害虫への防除のポイントを確認し、早期発見、早期防除に努めましょう。

### 【ハダニ類】

1回の産卵数が100～150個と非常に多く、25℃の適温時には約10日で世代交代をして繁殖を繰り返します。この時期は短期間で一気に数が増えますが、隣接株への移動は比較的遅いため、初発はスポット的に見られることが多く、その前に防除することが大切です。



写真1 ナミハダニの成虫

#### ○防除のポイント

- ・ナミハダニは薬剤抵抗性が発達しやすい害虫のため、同じ系統の薬剤を連用しない。
- ・下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ハダニの多発した株は、特に強めに葉かぎをした後に防除をするか、株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・葉かきしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- ・気門封鎖型薬剤は卵に対する効果がほとんど無いため、5～7日おきに複数回（2～3回）散布を行う。

### 【アザミウマ類（スリップス）】

アザミウマ類はハウス周辺の雑草からハウス内へ飛び込みます。年内にハウス内に侵入した場合、ハウス内で越冬し、暖かくなると一気に密度が増加するため、早期発見、早期防除を心がけましょう。



写真2 イチゴの花に寄生するアザミウマ類

#### ○防除のポイント

- ・本年はすでに活動し始めているため早めに防除する。
- ・秋口に発生した場合は、年内にハウス内で産卵していることがあるため必ず防除すること。
- ・ハダニ類の天敵を導入している場合は、天敵への影響が大きい薬剤が多いため、アザミウマ類が多発する前にIGR剤等影響の少ない薬剤で初発防除に努める。
- ・ハウスの換気時間が長くなると、外部から飛び込む可能性が増加するため、サイド側や妻面付近の株に注意する。
- ・ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。
- ・ミツバチに影響のある薬剤があるため、薬剤の選定には注意する。

**散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳をしましょう！**

**農薬の登録使用基準を遵守しましょう！**